

特277

特277-747



*76W10686 *

747

歌國

君が代の由來

東京日日新聞社編

特277

747



始



壹
 君
 代
 一
 等
 物
 入
 外
 廣
 守
 張
 流

時
 出
 五
 色
 七
 二
 式
 外
 部

時
 出
 五
 色
 七
 二
 式
 外
 部

(藏氏吉藤口戸瀬) 稿原『代が君』の旋律調越壹

壹
 君
 代

一
 等
 物
 入
 外
 廣
 守
 張
 流

獨逸人エッケルト氏

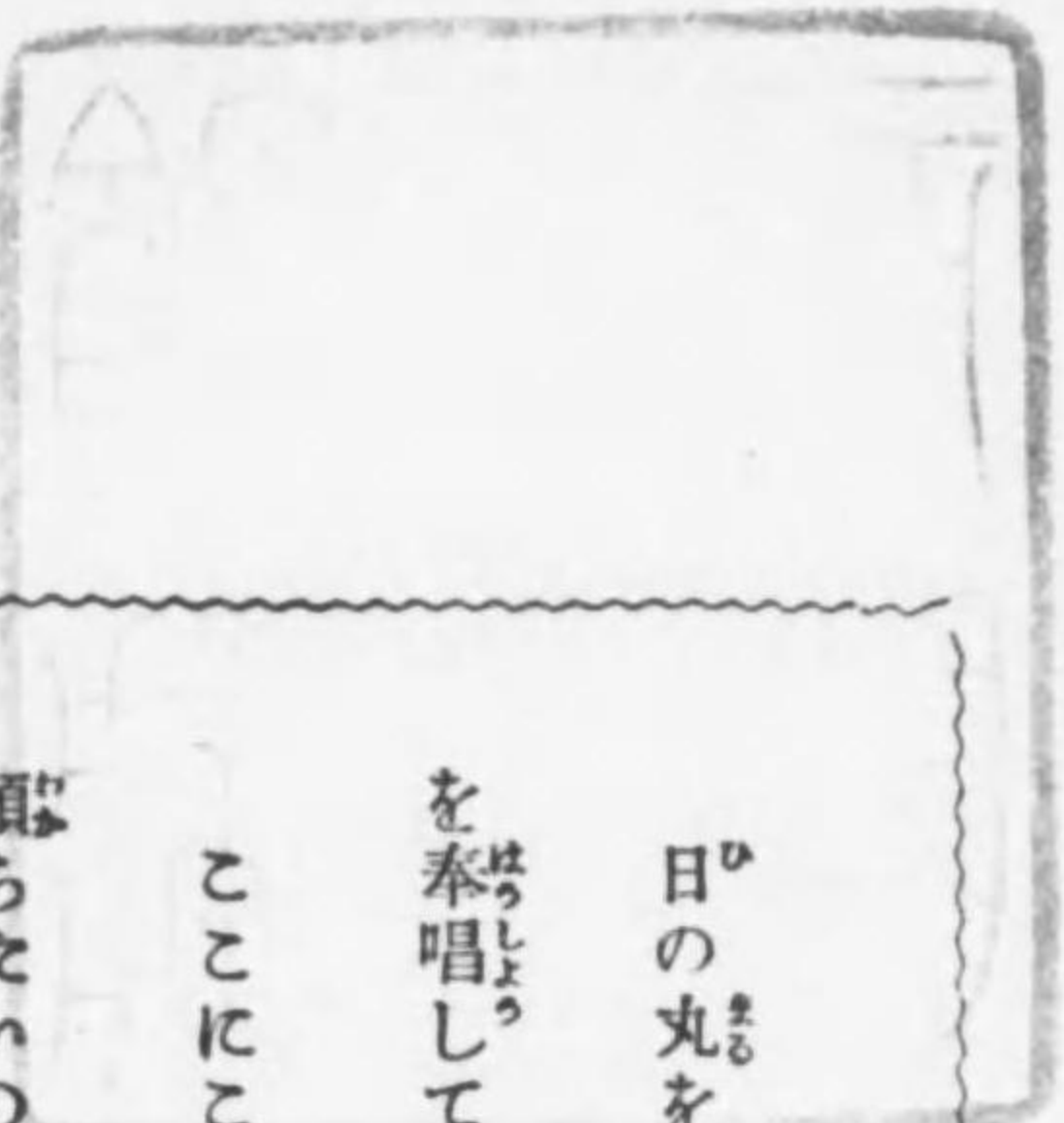


伶人長林廣守氏



日の丸を仰いでわれは世界に誇り得るを喜ぶ。さらに国歌「君が代」を奉唱して、その幸福の感激に涙なきを得ない。

ここにこの「君が代」の国歌制定の由来を述べて諸氏と共に、この喜びを願うのである。



76W10686



歌國君が代の由來

◇
宮内省式部寮樂手の手ではじめて「君が代」が演奏されたのは、明治十三年十一月三日の天長節。恰度ことしが五十年に當る。

この壯重典雅なわが國歌を作曲したのは、その頃宮内省に伶人長として笙を奏してゐた林廣守氏で、これに聲を和してうたふことは海軍省の雇教師だつたドイツ人のフランツ・エツケルト氏である。

◇
文久三年八月廿一日の生麥事件が開展して薩摩とイギリスの戦争となつた。イギリスの

日本及び支那艦隊司令官クーパー少将が、翌年八月十二日軍艦七隻を率ゐて鹿兒島を襲ひ、十五日から十六日にかけて砲火を交へたが、薩摩はよく戦つて、遂にイギリス艦隊は錨を巻き揚げるの餘裕もなくほうぼうの態で逃げ去つた事は有名な話だ。

たゞこの時、薩摩の武士を驚かしたのは、いよ／＼交戦明日に迫るといふので、こちらは何れも決死の別れをしてゐる夜に艦隊から波を渡つて静かな音楽が流れて来る。古來戰場に笙を聴き、琵琶を奏するの物語は知つてゐる。しかし今日の前りに嘔吐たる西洋樂器の奏樂を耳にして、一同たゞこつととした。



薩摩の心ある武士の間に軍樂の必要を感じしめたのはこの頃からのことで、いよ／＼藩から卅名の年少者を選んで、横濱の法華宗の妙香寺といふ寺に屯して、公使館護衛をやつてゐたイギリス軍隊の軍樂長ジョン・ウイリアス・フエンソン氏について、軍樂を傳習さ

せたのは明治二年の九月であつた。

この傳習生で、樂長役をしたのが鎌田眞平氏で廿六歳、一番若いのは僅か十四の高崎矢一郎氏である。高崎氏は後に海軍々樂長となつたがまだ存命されてゐられる。よく當時の物語をするが、羽織の前を釦で止め、股引を膝までまくり上げ、刀をさして、素足に草鞋をはいて、その上腰のところ用心のための草鞋もぶら下げて、ブラ／＼やつてゐたものだといふ。



このおかしな姿の中に、やがて君國に奉ずる一念は、自然に「君が代」を生み出すに至る。

一日、フエンソン氏はフレンチホーンをやつてゐる傳習生頼川吉次郎氏に向つて「歐米の諸國にはすべてその國歌といふものがある、日本にもあるか」と聞いた。頼川はどう考

へても、所謂國歌らしいものはないので卒直に「ありません」と答へた。

六

フエントン氏は「それはいけません、日本の恥です、君はすぐにどなたか先輩の方に頼んで國歌になるやうな歌を作つてゐらつしやい、私が作曲をして上げますから」とのことである。

穎川はもつともだと思つたので、日頃愛顧を受けてゐる後の元帥、その頃砲兵隊長をやつてゐた大山巖氏のところへ行つてこの話をした。

恰度、薩摩から出て御親兵大隊長をしてゐた野津鎮雄、少参事大迫貞清の兩氏がその席にゐて、「是非國歌といふものは必要だ、だがいまこゝで新しく作るといふのは大變だが今迄歌はれてゐるもので寶祥の降昌、天壤無窮を祈り奉つたいゝのはないか」といふ話になつた。

大山さんは「イギリスの國歌に「神よ我君を守れ」といふのがあるそうぢやが、われわれは日頃歌つてゐる「君が代」にしてはどうだ」と云つた。薩摩の青年がお祭などによく歌うし、琵琶歌の「蓬萊山」の中にも、これがある「實にいゝ歌ではないか」といふのである。野津も賛成、大迫も賛成、そこで穎川がすぐにこれをフエントン氏に示してやがて作曲が出来上つた。

ところがフエントン氏も日本の歌の調子といふものがよくわからない、仕方がないので、原田宗助といふ薩摩から通譯に来てゐる武士に、歌はせて、そこから作曲をして行つたが、原田のお國訛りをきゝながら、はゝアこれが日本の節だなど思つたらしく、出来上つた「君が代」は、三十二文字悉く二分音符を並べたに過ぎず、實に變手古なものであつた。

七

この作曲を見て第一に眉をひそめたのは樂長役の鎌田で、傳習生達を物かげによんで、「あんな威嚴のない句駄らぬ作曲を國歌などとは思ひもよらぬ、だが、他日われ／＼の手で改正するとして、今はたゞこれを習つて置けばいゝのだ」と、一同はそのつもりでやる事になつた。

八

傳習生達は翌年八月頃それ／＼薩摩へ歸つたが、たゞ歌詞を「君が代」に決定したことについては、大山さん野津氏、大迫貞清氏などの外に河村純義氏説、島津侯の御側用人だつた肝付半平氏説、當時の傳習生で、後に陸軍々樂長になつた西謙藏氏説などいろ／＼あるが、これを断定する資料がとぼしく、他の人々についてはいろ／＼大きな疑問もあるので多くは大山説によつてゐる。どちらにしても、とにかく薩摩藩士の間で「君が代」の誕生した事は事實である。

この第一次「君が代」の出來た翌明治三年九月八日は明治大帝親しく越中島にお成り遊ばして薩摩長州土佐肥後の四藩兵の訓練を御閱兵になつた。この時御前で薩摩の軍樂隊が前にも書いた西謙藏氏が樂手でこの「君が代」を吹奏し、こゝに天聽に達し、それからすつと明治十三年迄はこの曲節で、やつて來たものである。

實は明治九年に、時の海軍々樂長中村祐庸氏が、この樂譜の改訂を、「天皇陛下ヲ祝スル樂譜改訂之儀上申」といふ書面にして海軍省へ差出した。

中村樂長は薩摩の人で例のフェントン氏傳習の時は、僅か十八歳で長倉彦一といつてゐた。すぐにも改訂されるやうな機運であつたが、翌年が西南戦争、そのごたく／＼で延々になつてゐる中に、最初の作曲者フェントン氏は約束の年限が來て歸國した。

九

中村氏の願望が届いて、改めて樂譜改訂委員として、中村氏と共に、陸軍々樂長四元義豊、(この人も傳習隊生で當時は十八、平四郎といつてゐた) 宮内省伶人長林廣守の三人及び、フエントン氏の後にやつて來てゐた宮内省雅樂部の教師であり海軍省備教師獨逸人エツケルト氏が任命されたのは明治十三年七月で、從來はたゞ薩摩一藩内の問題の如くであつた「君が代」は、こゝに公然日本全體の問題として研究されるに至つた。この前後に於ける中村樂長(大正十二年七十二歳で病没)の努力は非常なものであつた。

委員の意見は期せずして、純日本式譜律である事に一致したので、すでにその準備にかゝり、僅かに三箇月で委員林廣守氏の作曲を採用と決定し、それを、その頃芝のお寺に住んで、音楽に精進してゐたエツケルト氏に頼んで適當な和聲をつけさせる事にした、エツケルト氏は、卅五六の働き盛りであつたが、殆んど徹夜してその和聲に苦心した。

いまわれ〜が歌ふところの「君が代」はエツケルト氏が、英國の古典的な教會風の和聲によつたもので、そこに一脈の日本趣味を織込み、壯嚴無比としたのは、實に偉いものであつた。

林氏の譜律は雅樂の壹越調といふもので、これがこの年の天長節に宮中御宴で奏された時、林氏の頬には幾筋かの涙が、さん〜として傳はつたものである。

林氏は大阪の人である。年少の時にすでに笙の天才と云はれ、琵琶の名手、天保十二年にはすでに一管の笙を奏して佐兵衛權少尉に任じられた人である。この「君が代」作曲の時、四十九歳であつた。(明治二十九年四月五日六十六歳で病没、正七位に叙された)

「君が代」の歌詞は、今迄學者の間で研究されてゐるところでは醍醐天皇の御命によつ

て、紀貫之きくわんしの外ほか四人にんが、萬葉集まんやうしふに入いらない古今ここんの歌うたを選せんして、延喜五年えんぎごねん四月十八日ごつじちちち（昭和四年しやわしやねんから廿四年前に）に、天皇てんのうの御前ごぜんに奏覽そうらんした『古今和歌集ここんわかしよ』の中なかにあるのを最初さいしよとしてゐるやうである。その古今集ここんしよの賀歌ががの一番先いちばんきに、

「わが君きみは千代ちよに八千代やちよに、さゞれ石いしの、いはほとなりて、苔こけのむすまで」

とあるが、題知だいしらず、讀人知よみびとしらずで、要するに、何人たれひとが詠たじたのであるか判明はんめいしない。

たゞ、この集しよで「讀人知よみびとしらず」となつてゐるのは、多くは萬葉直後まんやうちよくごの古い歌うたのみであるから、この歌うたも、餘程よほど古いものとの想像さうぞうはつく。

もつとも古今集ここんしよの古筆こしつには、

「わが君きみは、千代ちよにましませ、さゞれ石いしのいはほとなりてこけのむすまで」

とあるものも、少すくなくないので、古今集ここんしよ以前いぜん何千年なんねんかにすでに、この歌うたがあつて、それが、傳つたはり傳つたはつて、多少たせうの變化へんくわを示ししたのではあるまいかともいふ。

その「わが君きみは」がいつの間にか「君きみが代よは」となつた。その時代じだいについてはいろいろやかましい研究けんきゆうもあるが、『和漢朗詠集わかんらうやうしよ』以後いごといふ説せつが多い。



「君きみが代よ」の歌うたひ方かたについては、いろいろな問題もんだいがあるが、一時ひととき非常にやかましい事ことになつたのは「さゞれ石いしの」といふところ。こゝを「さゞれ」と一度息ひといきを切きつて、それから「石いしの」とつゞけるのがいゝのか、それとも一息ひといきに「さゞれ石いし」とやるのか、これが議論ぎろんになつて、文部省もんぶしやうがわざ／＼告示こくじを出だしたり、各方面かくほうめんからの問合とまあせに「一々ひとひと」一息ひといきに歌うたはしむべし」と回答こたへを出だした事ことがあつた。

それから「巖いはほとなりて」。あれは、假名かでは「いはほ」と書かくが、歌うたの發音はつおんの上うへでは正ただしく、しつかりと「いわわ」とすべきものであるといふ。「いはほど」とか「いはほと」とかいつてはいけなゝ。

二回繰返して歌ふ時は、一回は普通の速さで行くが、二回目の終りをやる時には、少しばかり遅そくするものだといふ事が唱へられてゐる。

わが日の丸の國旗にいろ／＼壯烈な物語が残されたと同じく「君が代」についての涙ぐましい日本人らしい話は山程ある。

陸軍省の櫻井忠温大佐の話に、よく戦場で、いよく明日は戦死と覚悟の前夜、軍服の下に死の晴れ着を着るが、大てい「日の丸」の下に「君が代」を書いてあり、それが血に染んでゐるのを發見する時は、戦友の死を悲しむといふよりは一種壯嚴な感に打たれるといふ事である。これは別だが軍神橋中佐は、羽二重に朝日と山櫻をかけた肌着を着してゐたといふ。

明治卅七年五月十五日日露戦争。わが軍艦一等戦艦八島が老鐵山の沖合で、敵の機械水雷にひつかゝつたのは、朝の十時頃であつた。

すわツと艦内さわめき立つたが、直ちに僚艦に對し「曳艦頼む」の信號を見て三笠が進んで来て、それから約二時間曳いてくれたが、艦内の防水手當も甲斐なく、どん／＼浸水して、今は早や沈没といふ悲しい事になつた。

此時艦長坂本大佐は、全乗組員に服装を改めさせ、上甲板に整列させて、

「君が代」

を合唱させた。肅然たる中にも海水が艦腹へ物凄く入つて来る響が耳へつく。

この間に軍艦旗は靜かに下ろされ、「天皇陛下萬歲」は繰返しく／＼叫ばれて、一同規律正しく短艇へ移つて間もなく、八島は海底深く没した。

坂本大佐が御眞影を捧げ重要書類を持つて最後に短艇へ移つたのは、八島沈没の僅かに三分前であつた。

高千穂艦が、世界大戦に参加して、膠州灣外の哨海勤務につきドイツの驅逐艦エス九十號から發射した魚形水雷でやられたのは大正三年十月十七日の眞夜中である。この時は艦長伊東大佐以下二百八十餘名は悉く、艦と共に死し、生存者は僅かに三名に過ぎなかつた。

その爆沈の猛烈だつた事は現場から二十海里を隔てた勞山港にゐて、その爆發の大きな煙や光を見たといふ位で、水雷の命中と共に、火藥庫に引火し、間髪を入れなかつたものである。

當時第二艦隊の加藤司令長官から海軍省への報告がある。

「生存者ノ言ニ據レバ、同艦ノ沈没後、波間ニ浮漂セル數名ノ艦員ハ「君ガ代」ヲ奉唱シ、又ハ「此處ハ御國ヲ何百里」ノ軍歌ヲ唱ヘ居タリト。以テ其ノ如何ニ專念君國ヲ思ヒ從容死ニ就キシカヲ察知スルニ足ルベク、本職ハ深く艦員ガ皇國軍人ノ本領ヲ發揮シタルカヲ喜ブト同時ニ、益々壯烈ナル其ノ戰士ヲ痛惜シテ、斷腸ノ念ニ堪ヘザルナリ」

奉天の野戰病院で「君ガ代」を唱ひつゝ、手術臺上の花と散つた琵琶歌「別れの國歌」の福知山聯隊の二等卒杉田忠吉君のはなし、その他、かうした悲壯にして且つ、われづがいざといふ時に示す國歌君ガ代への愛著物語は、語り來り語り去つて、盡るところを知らないものである。

昭和四年十二月五日印刷
昭和四年十二月十日發行

不許
複製

【實價金八錢】

發行所

東京日日巡回病院

東京市麴町區有樂町一ノ二一
東京日日新聞社内

編輯人並
東京市麴町區有樂町一丁目十一番地
東京日日巡回病院代表
久保勘三郎

印刷者
東京市芝區南佐久間町二丁目十一番地
下坂喜太郎

印刷所
東京市芝區南佐久間町二丁目十一番地
下坂印刷所

326

355

終

